

—ものづくりを始められたきっかけについて教えてください。

玉田 物心が付いてから、何かをつくるということが好きで、将来は「絵描き」になりたいと思い、美術大学に進学しました。座って絵を描くことよりも、少し体を動かすような作り方が自分に合っているかなと思い始めたことが、素材に行きつくきっかけになりました。

—少し体を動かすような作り方が合っていると思われたところから、立体作品をつくりはじめたのでしょうか？

玉田 美術大学で学んでいた時は、平面の作品を作成していましたが、平面に落とし込むというルールがあったからこそ、色々な表現が生まれました。

そのような中で、素材をダンボールに決めて平面に落とし込んだ時に、ただ貼るだけだと面白くないので、剥がしてみる、水を使ってみるなど、テイストやディティールの違うものを模索しました。それが表現の幅が増えることに繋がりました。大学を卒業してから立体の作品を作り始めました。

—ダンボールで恐竜や動物をつくろうと思ったきっかけを教えてください。

玉田 油絵を学ぶ中で、様々な画材を試し、最後は枝や木の実、落ち葉などの身近な自然の素材を取り入れました。その延長として、自然素材の雰囲気を保ちつつ、自分で美しい形をつくっていける素材がダンボールでした。折る、ちぎる、貼るという手遊びからつくることができるダンボールの素材は自分に合っていると思いました

ダンボールで作品をみせるには「命あるもの」が良いと思い、「動物」を作り始めました。ただ、「動物」は実在しているので、もっと創造した感じで作りたいと思い、行きついたのが恐竜です。恐竜は骨が発掘されている現実味と、姿形は人が創造した部分の両方を備えていて、そこが他の生き物にはない魅力だと感じています。

最初につくった恐竜的なものは15mのドラゴンです。

作るのであれば、大きい作品をつくりたかったのと、工作の範囲を超えたものにしたいという作家としての考えもありました。

ダンボールという素材は、工作の域を越えない素材ではありますが、それを超えるためには、「何をつくるか」「どのように作るか」を考え、大きいものを作ろうと思いました。当時のアトリエの中で作ることでできる、最大のサイズで作成しました。

—作品が大きいと重心をとるのが大変だと思いますが、どのように作られていますか？

玉田 まさに重心をとるのが大変です。ダンボールの重さがどのくらいになるのかわからないため、ひとまず作ってみるというやり方です。足を作ってみる、首を作ってみるなど、

まずパーツをつくり、つなぎ合わせて調整しています。

首の中は空洞にし、足の中にはダンボールを詰めてバランスをとったりもしました。制作直後は水分も含んでいるため、乾燥させて1週間後くらいに、再度確認して作っています。

大きな作品は、乾燥させていると「ミシッ」というような音がして、古い家のようにダンボールが呼吸しているような感じをうけます。あまり乾燥していると痩せたりもするので、生きているような感じがします。

——ダンボールの魅力や、作品を生み出す楽しさ、面白さについて教えてください。

玉田 柔らかいのに強度があり、重すぎないという、色々な素材の良い面を持ち合わせています。また、特別な道具がいらず、手遊びに似た感覚ですぐに作れるところが魅力と面白さです。ダンボールは、今やどこの家にも1箱はあるという身近で親近感が湧く素材だと思います。

ダンボールの特徴として、人の手を介している人工物ということもあり、人間の消費の跡のような象徴でもあると思います。そのダンボールがあればあるほど、人がどれだけ暮らしの中で何かを消費していることがわかったり、人間の何かを表していたりと、意味がある素材だと思います。そう意味でも、作品を作る上で「意味深な素材」とも思いますし、テーマやコンセプトなど表現しやすいのだと思います。

作品を作った後に、作品を見る人の驚きや笑顔も含めて「作る」と考えています。作品を他の方に見ていただけて喜んでもらえるか、驚いてもらえるかを常に考えています。

——展示のみどころや、皆さんへのメッセージをお願いいたします。

玉田 美術展となると「敷居が高いな」と感じたり、「難しそう」と思えるような「壁」の部分を取り除いて、「難しそうでも難しくない。」「難しく見ようと思えば難しく見える。」などの楽しみ方があると感じてもらいたい。小さな子どもの目線からも楽しめ、「面白そうだから行ってみよう」「見たら作りたくなった」という展覧会にしたいと思います。

見るだけではなく、「体験する」、「少し触れてみる」、「作ってみる」など、見たら作りたくなる内容にしたいと思います。是非会場で「体感して、体験して」ください。

「ものづくり」は、自分の考えや力を信じて、自分で答えを出すようなところがあると思います。人間に必要な力とも言える「自分で考える」、「自分で作る」、「自分で答えを出す」というようなことを、作品を見た後に感じていただけると嬉しいです。